
【没作】怪物の世界【一発ネタ】

烏野 某

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【没作】怪物の世界【一発ネタ】

【Nコード】

N1262W

【作者名】

烏野 某

【あらすじ】

おかしな世界と少年の話。

(前書き)

諸事情から没ってフォルダの片隅に放置していたのを、もったいな
いという事で投稿。

諸事情に関しては後書きで。

彼女のために、僕は怪物たちを狩らねばならない。

僕はそのために生まれてきたのだから。

「それで……ええと」

「天木です。天木皇^{あまぎこう}」

「ああ、そうだった。いや、最近歳のせいか忘れっぽくなっちゃってね。患者もこのところ増えてきているし、忘れないようにしてるんだが」

恥ずかしさをごまかすように苦笑いを浮かべた。小さな笑い声が、二人しかいない小さな部屋の中に響く。僕が笑わずにじっと見つめていると、先生はやがて小さく咳ばらいをして、手元のカルテに目を落とした。

先生が僕の名前を間違えるのは、これで4回目だった。きっとそのことも、先生は忘れているだろう。

他の患者ならば怒りを感じるはずだが、僕は特に何も思わなかった。こういったことを含めて、僕はそれなりに先生のことを気に入っているのだ。

先生は彼女のことに興味を持っているから。

彼女のことを受け入れ、知ろうとしているから。

それは僕にとっては何よりも嬉しいことでもあった。

「ふむ、検査のほうは順調だね……目は、今はどうもないかな？」

「はあ。変わらず、です」

「体のほうは？」

「同じく、です」

ふむ、ともう一度言って、先生は「失礼」と僕の右目に指を伸ばした。そのまま上下の瞼に触れて、大きく広げる。空気の冷たさが眼球に伝わる。眉間に皺を寄せた先生が、僕に顔を近付けた。

「やはり変化無し、か……薬のほうは効果無し、ということなのか……」

さっきまでとは違う「医者」の顔をした先生は、やっと耳に届く程度の小さな声で何やら呟くと、もう片方の目も同じように見て、ようやく僕から離れた。

「最近、何か変わったことはあったかい？」

「いえ、特に」

そうか、と先生はカルテに何やら書き込みながら頷く。こうして僕を観察したり、質問への答えを記録していくのが、先生の仕事だった。

僕にはよくわからないが、先生曰く僕は「世にも珍しい、奇妙な病気」にかかっているのだという。だから週に1、2度、こうして先生の病院へと足を運ばなければならなかった。

先生によって僕の病気が発覚してからもうすぐ3ヶ月くらいか。先生のもので「治療」……というか「検査」を受けるようになって

から長い時間が経ったけど、その病気とやらは未だに治っていないらしい。

そもそも当人である僕が病気を自覚していないのだ。治ったかどうかなんて分かるはずもない。ならば僕でない……悪く言えば「他人」である先生にも、分からないだろう。

例え、僕よりも何倍も頭の良いだろう医者であっても、患者が自覚しない病気を、どうして治療できるだろう？

「ふむ……じゃあ次は、これを見てくれ」

そう言って先生が取り出したのは、一枚の写真だった。キャンプ場が何からしい、緑の生い茂る場所に並んだ、大人の男女と、小さな子供の写真。どこにでもあるような、家族の姿。

「家族写真ですか。先生の知り合いですか？」

「いや、違うよ……やっぱり、生きたものにしか、反応しないのか？」

すぐに写真は先生の白衣の中にしまわれてしまった。その瞬間に聞こえた先生の呟きは、今までにも増して意味が分からなかった。

「そういえば、今日も彼女は家で留守番をしているのかい？」

いくつかの質問をした後、今日の「検査」は終わり、部屋の中の空気が少しだけ緩くなる。

いつの間にか出されていたお茶を飲んでみると、先生は椅子に座る姿勢を崩しながら、そう話しかけてきた。医者としての質問とは異なる、感情のこもった問い。

そこにどんな感情がこもっているのかは、僕には分からなかったけど。

「はい。あの子は自分ひとりじゃ外に出られないから。今ごろは作り置きしておいた昼食でも食べてるんじゃないですか？」

「はは、今頃昼食か。朝に弱いのは相変わらずのようだね」

二人揃って壁にかけてあった時計を見、笑う。時計の針は既に午後の3時を過ぎていて、今からじゃあ昼食、というより3時のおやつだ。

あの子、彼女、伊麻野梓^{いまのぞう}。

朝に弱い、というよりは夜に強すぎる彼女は、傍目には僕以上に病人らしい少女だ。見た目や性格、普段の生活での行動、全てを統合した理由から、僕も先生もそう思っていた。

だから先生が彼女に興味を示すのは、彼女を病人だと判断しているからだろう。いつか、彼女をここに連れてこれまいか、なんてことを言われるかもしれない。

だけどその時僕はきつと、先生の希望に応えることはできない。彼女はあの部屋から出してはいけないのだ。ずっと昔、先生と出会うよりも前に僕が彼女と、そう決めたのだから。

『だからコウ、あなたはご飯を作ってくれない？ 私を生かすために。あなたがしたくないというのなら、話は別だけど』

あなたの私への愛が、ただその程度だったのだと分かるだけよ。

そう言われては、断ることなんてできない。彼女はどうすれば僕を思うとおりに動かせるか、それを知っている。恋は盲目とはよく言ったものだろう。

「ああ、そういえば昨日、彼女と家でゲームをしてたんですけど…」

だけど僕は絶対に後悔することはない。彼女をあの部屋に閉じ込めたことも。彼女の言いなりとして動いていることも。

……ああ、もしかすると。

これこそが、僕の病気というやつなのだろうか？

先生に別れを告げ、病院から出た。やや薄暗かった病院の中とは違い、外の世界は思わず目を細めてしまいそうなほどに明るい。夏が近付いているのが、肌に感じる空気の暖かさで分かる。

そんな外の世界では、怪物たちが自由気ままに歩き回っていた。

どれも人のそれとは大きくかけ離れた、様々な動物の容姿を混ぜ合わせたような異形の姿。ごつごつ、ぶつぶつ、もじゃもじゃ、ぐちゃぐちゃ。彼らが体を動かすたびに、そんな音が耳に入ってくる。

僕は足を動かし、怪物たちの歩く道の中に入り込んだ。僕よりも一回りは大きな巨体に囲まれ、すぐに足元以外が見えなくなった。

【 ！ 】

【 ？ ～？ 】

背後から聞こえてくる、電子音を組み合わせたような高い声。会話をしているのだろうか？ 少しでも首を動かして見ると、深海に生息しているようなぶよぶよとした塊が2つ、体を揺らしながら鳴き声を上げていた。

時折小刻みに体を震わせているのは、笑っているのか。相変わらず、怪物たちのことは分からない。分かりたくもないけど。耳障りな音に息をこぼす。

この世界は怪物たちで溢れている。どこも、かしこも。きっと日本全部 世界中。

いつからそうなったのか、もしくは始めからそうだったのかは分からない。僕が自分の名前を覚えるようになった時には、世界は怪物だらけだった。両親の姿を始めて見た時のショックは、今でも覚えている。あれから僕は、ネズミが苦手になってしまった。

怪物に支配された世界。まともな人間の姿をしているのは、僕の知る限り、たった2人だけ。そう考えると、僕と梓が出会い、こういう関係になったのは、偶然ではないのかもしれない。運命と言うのは恥ずかしいけれど、それ以外の言葉を思いつけない。

『相変わらず恥ずかしいことを堂々と考えるね、コウは』

そんなことを思う僕に、彼女はきつとそう言うだろう。少しだけ気持ち悪そうな顔をして。

「……………あ、そうだった」

梓の顔を思い出した瞬間、僕は家を出る前に彼女に言われていたことを思い出し、立ち止まった。後ろを歩いていた深海生物2匹の体とぶつかり、前によるめく。深海生物たちは顔にあたるだろう部分をぐにやりと歪め、全身を大きく震わせながら僕を追い越していった。

僕はそんな2匹の背中を見送りつつ、彼女からの「おつかい」の内容を反芻する。僕よりも病気の彼女と、始めに交わした約束。

『私は怪物しか食べることができないの。だからコウ、あなたが私を好きだと言うのなら、私を愛してると言うのなら、あなたが怪物を 私のために食べ物を狩ってきて』

だから、僕は怪物を狩らなければならない。
何よりも大切な彼女のために。

「……………ちょうどいいか、あれにしておこう」

見た目は美味しくなさそうだけど、変わった見た目のものは意外と美味しいと言うし。きつと彼女も気に入ってくれるだろう。

巨体の波に埋もれてしまいそんな深海生物たちを見失わないよう、僕は足を速める。ポケットの中に入れていた折りたたみナイフの感触を、ズボン越しに確認しながら。

そうして今日も僕は怪物を狩る。

怪物しか食べられない彼女のために。

彼女のために在るような、餌場の中で。

(後書き)

書いた後で某エロゲに設定が似ていることに気付き、やむなく封印。

投稿しちゃったら意味ないけど。

これって だよね？ って感想が来たら削除するつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1262w/>

【没作】怪物の世界【一発ネタ】

2011年10月8日10時56分発行